

1) 著作権保護のための表示

-----

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.

-----

2) 研究会基本情報

-----

「空間統治と民族関係の人類学—東南アジアを中心として—」

(令和5年度第2回研究会)

日時：令和6年2月11日(日) 14:30~17:30

場所：AA 研 304 室

**「漁業から観光業へ? : 海民モーケンの生業からみる民族関係の変遷」**

鈴木佑記 (AA 研共同研究員 国士舘大学)

アンダマン海に生きる少数民族モーケンを取り上げ、彼らの生業に注目して他民族との関係性の変遷を追った。アンダマン海で日英軍が戦闘を繰り広げた第2次世界大戦を一つの区切りとして、戦前期、戦中期、戦後期(1950~70年代)に区分したうえで、それに観光開発期(1980年代から現在)を加え、全部で4つの時期に分けて論じた。結論は以下の通りである。1980年代以降、政府によるアンダマン海域の管理が強化された。その結果、モーケンは陸上がりして漁業に従事する機会が減り、観光業に従事することが多くなってきている。しかし、それは単純に漁業から観光業へと主な生業が変化したことを意味しない。過去にも鉱夫や真珠母貝ダイバーとして働いていた時期があったように、時勢に合わせ、その時に利用できる海の資源(生物資源、鉱物資源、観光資源)を見出し、他の民族と関係を取り結びながら、生業に従事してきている。

## 「バンガイ諸島サマ人の移住をめぐる交易の変容」

中野真備（AA 研共同研究員 人間文化研究機構・東洋大学）

本発表は、東南アジア島嶼部3カ国（フィリピン、マレーシア、インドネシア）に拡散居住する海民サマ／バジャウ人（以下、サマ人）を対象としたもので、特にインドネシア東部に位置するバンガイ諸島タミレ村における現地調査に基づき、移住支援政策と地震という、同村における移動・移住の2つの大きな契機と、それによる交易や社会の変容について試論的に考察するものである。

バンガイ諸島は、17～18世紀にはベッコウ、18世紀後半から19世紀にかけてはナマコを産出し、バンガイ王国に海産物を提供してきた。その重要なアクターとなったのが、これらの採取・採捕に従事する半ノマド的なサマ人である。タミレ村は、これら海産物の採捕や取引の経路が東西南北に交差する位置にあり、海の要衝として発展してきたと考えられる。生態的・地理学的条件からみれば、同村の位置する湾には淡水源や燃料となるマングローブ林、船の係留に適した砂地といった、海を移動する人々にとって便利なものが揃っていた。ここでは、海産物取引を担う華人や、青果物やサゴヤシなどを生産する内陸民族のバンガイ人、衣料品や生活用品を行商するブギス人、そして漁撈をおこなうサマ人などが、流動的な交易をおこなってきた。サマ人が一時的に寄港、滞在したこのような海は、やがて集落となり、タミレ村を形成した。このとき、タミレ村には「社会集団のようなもの」である4つの小集落があり、それぞれ生業や出身地域などにある程度の傾向があった。

タミレ村はその後、スハルト政権下で実施された村落統合開発プログラム（PKT）をはじめとするいくつかの移住支援政策により、海上に居住していた一部住民が希望して陸地に移住をした。しかし公務員や仲買人等以外の住民の多くは、利便性に欠けるなどの理由で再び海に戻っていった。さらに2000年に発生した津波被害により沖合の集落が全壊すると3つの小集落が沿岸部に移転したが、この際も公務員や仲買人等を生業とする住民が率先して陸地に移住した。これらの契機による移住は結果として、ブギス人や華人系サマ人を含む仲買人などの多い小集落出身住民は陸へ、サマ人漁師の多いその他集落は海へと、村内の民族集団を可視的に分離することとなり、「海側」と「陸側」の領域が前景化した。

沿岸部への移住は、経済活動や交易面でも少なからぬ影響をもたらした。たとえば海上家屋の杭材が壊れやすくなり、交換頻度が高くなったことで需要が増し、木材を扱うブギス人商人が新たに移住してきた。陸に移住した人々は「石の家」を求め、バンガイ諸島の産出する石灰岩を利用した採石・建設業が急成長し、これを華人が担うようになった。さらに同村に公設市場が設置され、移動手段が変化し、インフラが整備されると、陸海の他民族との交易拠点が同村に集約され、固定化しつつ発展したことで、かつてのそれとはまた異なる機能を備えた現代の寄港地となった。

本発表に対しては福井県立大学の加藤氏がコメントーターを務め、詳細な記録をどのように一般化し、空間統治や民族の大きな文脈に位置付けていくのかということを中心に議論が交わされた。参加者からは、経済活動の変化が移住によってもたらされたものなのかどうか、またそこに他民族集団がどのように関わるのかなど、試論段階の本研究に対する建設的なコメントが寄せられた。